荒縄工房PDF文庫　小説『亜由美』第一巻

あんぷらぐど著

東京のいつかどこかで

第一部

目次

1、運命の再会 2
2、お祝いの夜 13
3、喪失と崩壊 32
4、百均の苦痛 64
5、亜由美の会 90
6、肉袋の悲哀 104
7、徹夜の訓練 119
8、漆黒の刻印 132
9、二つの風船 145
10、ビールの味 157
11、発熱の地獄 171
12、逃避する脳 190
13、不安な休日 206
14、ゲーム作り 221
15、総会の決定 238
付録 258

運命の再会

亜由美が、剛介と再会したのは、四月の下旬だった。大学に入って、同時に一人暮らしも始めていた。毎日が、あっという間に過ぎていく。真新しい建物の、真っ白な廊下を気分よく歩いていたら、思いがけず、ふいに目の前にドアが開いたように、亜由美はそこにぶつかってしまった。

「亜由美だよね」

ギクッとした。

剛介は、三つ年上だったはずだ。忘れるはずのない中学二年のとき……。あれから剛介は引っ越したのか、姿を完全に消していた。亜由美の心に暗い大きな穴を作って……。

いくつも大学がある東京の、まさかこの大学にいるとは、思

いもよらないことだった。
「メガネをしているから、別人かと思っちゃったな」
脂ぎった顔。ぼさぼさの髪。あの頃よりも太ったようで、体重は百キロ近いのではないか。不健康そのものに見える。
「また会えたね。びっくりだよ」
「すいません」
亜由美は逃げようとしたが、剛介の手は早く、細い手首をがっしりと握られていた。毛に覆われた浅黒い手が、真っ白な亜由美の手首にまとわりつく。湿った手のひらの感触に鳥肌が立つ。
「忘れたの、オレのこと？」
「忘れました」
「うそだろ。忘れるわけないよ。オレに抱きついて、泣いたじゃないか」

「ウソです」
「ウソなもんか。あっ、その泣き顔。ミスキャンパスに出たら、きっと人気者になっちゃうね。メス豚の亜由美ちゃん」
「やめてください」
「オレ様のメス豚なんだもん。誰かと付き合ってるの？　まともなヤツとは付き合えないでしょ、変態だから」
「大声を出します」
「それがなにか？　オレは平気だよ。もしかして、オレに会いたくてこの大学にしたの？」
「違います。知りませんでした」
「またまた……。おまえ、もうあそこがべっちょべちょになっちゃってんじゃない？」
「妙な言いがかり、やめてください」
亜由美の手が伸びて、剛介の頬を叩こうとしたが、届かなか

った。両手ともに剛介に掴まれ、体が密着するほど引き寄せられる。
知らぬ間にすっかりホンモノの獣へと成長した臭いがする。
「おまえの気持ちを察してやればよかったなあ」
「ふざけないで」
「お嬢様のようにカッコつけちゃってさ」
「放してください」
「そんなこと言っていいの？」
亜由美は、反抗できなくなっていた。荒い息だけをしている。
広いキャンパスには、公園のように木々が植えられ、芝生がはられていた。人影はまばらだった。次の講義がもう始まっているのだ。
「おまえにもう一度会いたいと思ったけど、本当に会えるとは思わなかったな」

剛介はぐいぐいと亜由美を引きずるように、古い校舎のある一角へ向かって行く。そこはいずれ取り壊されるため、現在はほとんど使われていない。
「なにするんですか」
「決まってるじゃない。もうオトナだろ？　だったらさ」
「イヤです」
「おまえ、そんなこと言える？」
ふと亜由美は、剛介の手の力が緩んだと感じて、思い切り振り切った。簡単に自由になれた。
「これは運命なんだ。ここで再会したんだ。すばらしいことだよ」
金縛りになっていた体が、少し動き出す。
「逃げてもムダだよ」
剛介は笑った。

亜由美は走って教室に向かった。
遅れて席についたが、教授は幸い、さらに遅れてやって来た。
忘れ去ったはずのこと。記憶の中に閉じ込めて、封印したこと。それをプラスのエネルギーにして、念願の大学に入り、これからさらに夢を追って進もうとしていた自分。
それが、突然、終わりを告げた。
なんの講義だったか、さっぱりわからなかった。楽しいはずの大学生活が、早くも終わろうとしていた。いや、それだけではない。自分の人生そのものが、過去の亀裂の中に、引きずり込まれていくようだった。
運命は、亜由美をいいだけ明るい人生の扉まで進めておきながら、その扉の向こう側をチラッと見せただけで、閉じようとしている。
剛介との出逢いを噛みしめていた。封印した記憶。自分のこ

とではなく、創造の世界だったと思い込むことにした世界。恐ろしいほどバカな自分を呪った。
あの頃、剛介に憧れていたのは事実だ。だが、それは、だれもがふと思うような淡いものだった。
剛介はなかなか、亜由美が思うようには行動してくれなかった。剛介は、亜由美を無視し続けていた。
剛介は、冷ややかに亜由美を見て笑うだけだ。
そして、ある日、彼は引っ越していった。一年もすると、兄たちも彼とは連絡を取らなくなって、ウワサも聞かれなくなった。
バカな自分。あれから思い出すのは、剛介とのことばかりだったが、再び会いたいのかどうか、自分でもよくわからなかった。
もし剛介と再会してオトナとしての付き合いをはじめたら、

自分の人生がそこで大きく変わっていくに違いない、と亜由美は思っていた。それがいいことか、悪いことか。考えるまでもなく、いいことではないだろう。熱に浮かされたような初恋の相手。冷淡で、こちらに関心のない相手。うまくいくはずはなかった。

古い記憶を捨てることにした。

するとこれまで苦手な科目ばかりで、学校が大嫌いになっていたのに、徐々に成績が上がっていった。自信をつけ、誉められることが増えていった。亜由美は、バカな小娘だった自分を過去のものとして、きれいに消し去っていた。

まだ人生は始まったばかりで、未来は明るい希望に満ちていた。今朝までは……。

難関の大学に受かり、親兄弟を説得して一人暮らしも始めた。

「そうね、亜由美ならやれるかもね」と最後まで反対した母親

も認めてくれた。
実家から離れての暮らしは、不便で、寂しくもあったが、楽しかった。
剛介がここにいるなら、きっと自分は大きく変わるだろう。人には言えないような期待があった。
その夜、夢にうなされた。夢の内容はよくわからなかった。思い出したくなかったのかもしれない。
ただ、下着がぐっしょりと濡れて、何度も絶頂を味わったかのように、だるく、疲れ果てて目が覚めた。微熱があるようだった。
大学へ行けば剛介がいる。それを避けては通れない。
亜由美は、重い体を引きずるようにして、大学へ行った。行けば、もしかすると事態は大きく変わっているかもしれない、と淡い期待があった。

それも、すぐに打ち砕かれた。
キャンパスに入るなり、剛介が声をかけてきたのだ。
「どう、よく眠れた？」
「私のことなんて、興味ないんでしょう？」
「そんなことないよ。よくこの大学に入れたね。お祝いしよう。一緒にメシでも食べようよ」
「わかりました。何時にどこへ行けばいいんですか？」
「じゃあ、今夜な。七時にここで」
その日は、昼間は講義に集中できた。亜由美は、これでいいのではないか、と考えるようになっていた。勉強はしっかりできている。やりたいこともできるだろう。未来はまだ自分のものだ。
剛介との関係も、過去の傷に過ぎない。自信あふれるいまの亜由美は、過去の自分とは違う。それに気づけば、そのうち、

彼も亜由美を諦めるだろう。そう願っていた。

お祝いの夜

夜の八時に街中にいる。ここに引っ越してきてはじめての経験だった。

剛介の指定した居酒屋。雑居ビルの一階にある。ありきたりのものしか出ないが、深夜までやっている。そして安い。学生がよく利用しているせいか、サラリーマンは敬遠する店だった。

剛介は奥まった個室で待っていた。掘りごたつ式で、テーブルにはすでにセットのツマミが並んでいた。

剛介はジョッキでビールを飲んでいた。

これではまるで、剛介の彼女か、それとも命じられたらなんでもする娼婦のようではないか、と亜由美は思う。酒を飲んではいけない、と気をしっかり持って、剛介の向い側に座った。

亜由美はただのウーロン茶を頼んだ。
「じゃ、再会を祝してかんぱーい」
仕方なくグラスを合わせた。
「本当に、これで終わりにしてくれるんですね？」
「うーん」と剛介は返事をはぐらかす。「おまえのお祝いなんだよ。まだ、再会したばかりで、ろくに話もしていていないしさ。五年も会っていないなんだから、もうちょっと話そうよ。お兄さんたちは元気？」
しばらく故郷の話が続いた。共通の知り合いの消息を亜由美は知っている限り、教えた。
その間にも、剛介は酒を飲み、串にさしたモツなどを食べる。唇にタレがべったりとつく。それを指で取る。舌を出して肉汁をすする。チュバチュバと下品な音を立てる。
「悪い、ちょっと待っていて」

途中で何度か、席を立ってトイレに行く。
店員はどう思うだろう。あまりにも剛介の傍若無人な態度に、亜由美をどういう女だと思うだろう。
今度トイレに行ったら、そのスキに帰ってしまおう、と彼女は決めた。
亜由美はただのウーロン茶を飲んでいるつもりだった。ただ、店全体が酒の臭いがあふれていて、よく味がわからない上に、暑いので、ついつい口をつけてしまっていた。
三杯ほどウーロン茶を飲んだところで、それが、やけにおいしいことに気づいた。普通のウーロン茶ではない。もしそうなら、三杯も飲めるはずはなかった。
「私、酔ったんですか？」と聞いていた。
剛介は笑っていた。
「うーん、そうかも。かなり早いピッチでウーロンハイを飲ん

じゃってたから」
「ウーロン茶、です」
「ああ。ここにはオレの友達がバイトしてるんだよね、そいつに、おまえがウーロン茶というのはウーロンハイのことだから間違えずに濃い目に作ってあげてね、と伝えておいたんだ。気づかなかったの？」
うかつだった。もう遅かった。体がだるく、力が出ない。頭がぼんやりして、眠くなってくる。
「送ってあげるよ」
外に出ても、春らしい生暖かい風が吹くばかりで、亜由美の酔いはさめない。
「いいです。自分で帰れます」
「ダメダメ。ほら、貸してごらん」
バッグを取り上げられ、中を漁られて、マンションの住所も

覚えられてしまった。
歩いて数分のところにあるワンルームだった。
剛介は亜由美を抱えるように部屋に入れてやり、ドアをロックし、鍵を自分のポケットに入れた。
「許してください」と亜由美は涙を浮かべた。体も頭も十分には働かない。酒に酔ったことがなく、もはや自分が信じられなくなっていた。
これまで積み上げた自分が崩れようとしていた。
「おまえさ、本当はオレに会いたくて、大学をここにしたんだよね？」
「違います」
「オレがここにいると知ってたんでしょ。お兄さんから聞いて、がんばって勉強したんだね。イイコイイコしてあげよう」
「そんなこと、ありません」

剛介は、見渡せばすべてが目に入る狭い部屋を歩き回り、亜由美のものを無造作に手で触れた。
ベッド、机、本棚。机にイスはなく、ベッドに座って勉強する。ベッドにはクッションがいくつもあり、縫いぐるみもある。
「おまえ、女だなあ。いい臭いがしてるよ」
剛介はふとんをめくり、ベッドの中央部に鼻をつけた。
「やめてください」と亜由美の声は、かすれ、弱々しい。今朝見た夢のことを思い出す。なんだかわからないが、淫らな夢だった。それで、おねしょをしたように下半身が濡れていた。
その跡に、剛介は鼻をつけて、ニヤリと笑った。
「ここはいいね。オレのアパートなんかじゃ、隣の声が筒抜けだけどさ」
押し入れをあける。まだ本の入ったままの段ボールが二個。衣服。それをかきわけていき、とうとう剛介は、笑いながら、

一本の電動マッサージ機を見つけ出した。
「肩でも凝るの？」
「はい」
「ウソつきだな、おまえ。もしそうなら、こんな奥にしまっておくわけがないよ。やましいからだ」
「ちがいます」
だが、剛介はその先端に鼻をつける。
「うーん、ひょっとして、おまえ、メス豚なんじゃないの。そんな臭いがするよ。夕べも、これでおまんこを慰めていたの？」
亜由美は涙を流すだけで、もう声も出ない。ようやく体をおこして、床にへたり込むようにして、剛介を見上げていた。
「おとなしくなったね。イイコだね。それでいいんだよ。亜由美は、ドスケベで淫乱で、いじめられるのが大好きな変態なんだよね？」

亜由美は、顔を横に振った。
初恋の、片思いの剛介の口から、そんな言葉は聞きたくなかった。
剛介はユニットバスのドアを開けた。ワンルームのマンションだが古い設計らしく、トイレと風呂が一体になっている。小さな棚をあけると、生理用品とむだ毛処理用のシェーバー、そして大量のイチジク浣腸があった。四十グラムと、もっとも容量の大きなタイプで、しかもノズルが長い。
「いいものを見つけちゃったな」とその箱を手に部屋に戻る。
「やめてください」と亜由美は言う。
剛介は彼女の頭を手で撫でてやった。
「素直になれよ。あんなにいいご両親やお兄さんたちと離れて、一人暮らしすることにしたのは、なぜだい」
「大学に合格したから」

「違う違う。本当の亜由美は、そんな風には考えていないでしょ。一人暮らしなら、オナニーし放題だもんね。オレが欲しくて大学に来たんだから、一人暮らしじゃないとマズイもんね。それも女子寮か、女性専用のマンションじゃなくて、亜由美はこんな普通の、ちょっと古いマンションを選んだわけだ」
「違います。予算に合うところが、ここしか空いてなくて……」
「いいんだよ。おまえ、もう燃えちゃってるんじゃない？　オレに出会っちゃったんだもんね。よかったじゃん。夢、かなったじゃん」
「違います」
「亜由美がウソをついてるかどうか、体にきいてみればわかっちゃうんだけどな」
剛介は亜由美の背後に回り、抱きしめた。無骨な手が亜由美の豊かに実った乳房を服の上から握りしめる。オトナの女へと

変貌した生硬い肉の感触。小さな乳首がツンと立っている。
そして、臭い口で、亜由美の唇を奪う。
自分とはまるで違う臭いが口内を蹂躙している。舌が無遠慮に入り込み、あらがう亜由美の舌に絡まる。
長い抱擁とキス。剛介は舌で亜由美の顔をなめ回した。
亜由美が期待していた再会ではなかった。それどころか、剛介は、亜由美が思っていたような男でさえなかった。いや、そうではないかもしれない。亜由美は、うすうす、剛介の本質を見抜いていたのではないか。だから、怖いもの見たさで……。
「ほらほら。素直になっちゃえよ。待ちに待った再会の日なんだから」
亜由美にはあらがう力はなかった。酔いのせいもあって、気持ちがよかった。こんな風にされることをイメージしていた自分がいた。それも事実だ。

一人暮らしの目的は、剛介の言う通りなのかもしれない。もう一人の自分が、まじめで勉強のできる自分を罠にかけ、剛介と再会するように仕組んだのだ。

剛介の指がスカートの中に入り、下着の上から股間のやわらかな肉の丘をまさぐった。

それに反応するかのように、亜由美はおしっこを漏らしてしまった。出始めると、止まらなかった。

「あーあ。やっぱりね。体はウソをつけないよ。とんでもないメス豚じゃん」

小水の中にへたっている亜由美の姿が、剛介のケータイで撮影される。そのまま服を少しずつ脱がせては、写真を撮っていく。最後にメガネを外す。

全裸にされたときに、剛介は「やっぱり」と確信した。

「自分でつるつるに剃っているんだね。どうしてそんなことを

するんだろうね、誰に見せるの？　もしかして昔、オレがそうしろって言ったから？」
「はい」と亜由美はとうとう、認めてしまった。「毎日、自分で剃っています。剛介様から、そうしろと……」
「イイコだね。じゃあ、ちゃんとオレが言う通りに真似して言うんだよ。私、亜由美は淫乱なメス豚です」
そんなことを言えるだろうか？　亜由美は思いもよらなかったが、酔っていたせいか、体が熱くなって仕方がない。
「ほらほら、言わないと許さないよ」
亜由美が、怪しいろれつで復唱する。
「私、亜由美は淫乱なメス豚です。どんな恥ずかしいことも、どんな苦しいことも、どんな痛いことも、剛介様のご命令には、いつでも、どこでも無条件で従います。それが、私、メス豚亜由美の本当の姿です。どうか、剛介様が飽きるまで、ご命令を

ください。もしご命令に従わないときは、厳しく罰してください」
言い終わっても、自分がなにを言っているのか、はっきりとした自覚がなかった。
「よし。よく言ったね。忘れちゃダメだよ。オレとおまえのケータイで録画しておいたからね」
亜由美はこくりとうなずいた。もはや自分の人生は終わったのだろうか。運命の再会とは、こういうものだったのか。そして、もしかして、これは自分で期待していたことなのか。
「じゃ、メス豚亜由美に、最初の命令をしちゃおうかな。自分で汚した床を、舌と口できれいにしなさい」
いきなり自分のおしっこを口で処理しろというハードな命令に、亜由美は戸惑うが、拒否する力はなかった。
全裸で、床に舌を這わす姿は、写真とムービーで保存された。

そして、まだ男を知らない恥部とアナルも、記録に残された。
「おまえがオレの気に入らないことをしたら、これを、おまえのお父さんやお母さん、そして兄貴たちに送ってあげようね。みんな喜ぶと思うよ」
「それだけは、許してください」と亜由美は言いつつも、いつか、剛介がそうする日が来ると確信していた。両親や兄たちは、亜由美の本当の姿を見るだろう。そして亜由美を一生、許さないだろう。
「自分の小便の味はどう？　おいしい？」
「おいしくありません」
「そんなはずはないと思うよ。これからは、それがおまえが大好きな飲み物になるんだからね。言ってごらん、本当のことを」
「おいしいです」
「わかったみたいだね。じゃ、顔を洗ってきて。それから持っ

ている下着を全部、ここに置いて」
顔を洗って口をゆすいで戻った亜由美は、十数枚あるパンティを剛介に差し出した。剛介はそれを床に落とし、足で小水と唾液で濡れている床を強くこすった。
床には、さっきまではいていたパンティを含めて、彼女が持っているすべての下着がぐちゃぐちゃになっていた。
「あーあ、こんなに汚れちゃったね。ばっちいなあ。捨ててくれない？」
「え？」
「命令は一度しか言わない。聞こえたはずだよね」
「全部ですか？」
これを捨てれば下着がなくなってしまう。
「聞こえたよね？」
「はい」

亜由美は、自分の下着をすべて捨てさせられた。
「これからは、毎日、メス豚らしい格好をしないと、おかしいからさ」
ブラは六枚あったが、剛介が二枚を選んで、独特の形にハサミで切った。一つは下側にしかカップを残さず、つければかえって乳房が突き出たようになってしまう。もう一つは乳首部分だけ切り取って、飛び出させるようにした。ほかのブラはただ切断してゴミ箱へ捨てる。
「おまえ、何カップ？」
「Cです」
「思ったよりは小さいんだね。もっと大きくしなくちゃね」
剛介は勝手なことを言う。
「ジーンズとかズボンは？」
「はい」

ジーンズは二着あった。どちらも、剛介は太ももの付け根あたりから足の部分をばっさりと切り捨てる。いわゆるホットパンツだ。
「いいだろう。セクシーで」
スカートは三着あったが、それは「いまいち」と言われて捨てられた。ワンピース二着だけがかろうじてなにも手を加えられることなく残された。一枚は黒いノースリーブ。もう一枚はオフホワイトの七分袖。どちらも、ふんわりとしたもので、裾は膝上だった。
「オレが命じた服装で学校に来てほしいんだよね。本当はメス豚はいつも全裸だよね。だけどまあ、犬だって服を着て歩いているぐらいだから、そういう意味の服は許すからさ」
「わかりました」
「言っておくけど、一年中だよ。これからは暑くなるからいい

けど、冬もだよ」
「はい」
その頃になって、亜由美も酔いはかなり醒めてきたが、現実とは思えない状況に、今度は体が震えて仕方がなかった。
「まだ、処女？」
「はい」
「よし、じゃあ、さっそく、そいつをいただくとするか」
そうなのか、と亜由美は思う。剛介は結局、それが目当てだったのか。それなら、むしろラクかもしれない。つながりを持てば、剛介は変わるかもしれない。これが、亜由美が想像するような恋愛になっていけば、剛介も人間らしく気持ちが落ち着いてくるのではないか。
「じゃ、支度しようね。さっそくこれを着てさ」
「え？　でも……」

外に出るとは意外だった。亜由美はこの部屋で剛介に抱かれるのだろうと期待していたのだ。この部屋なら、かなりのことでもガマンできる。だが、外へ出るとはどういうことなのだろう。

「命令したんだよ」

亜由美は穴あきブラをつけ、素肌の上に白いワンピースを着た。メガネをかける。

「行くぞ」

「行くって？」

「おまえの処女をもらうんだよ。こんな部屋じゃ、メス豚らしくないし、思い出にならないし。もっとお祝いらしく、おもしろくしようよ」

ラブホテルにでも行くのか、と亜由美は剛介のあとから、不安になりながらもサンダルをつっかけて夜の街に出て行った。